批評・紹介

清朝前史の研究

三田村泰助著

昭和四十年十月　東洋史研究會
A5判　四九二頁

わが國における清朝入關前史の研究は、夙く明治末期に内藤湖南博士によって着手されて以來、幾多の學者によって手がけられ、華々しい成果を擧げたのであった。このたび斯界の第一人者である三田村泰助博士の大著「清朝前史の研究」が東洋史研究叢刊の一つとして刊行されたことは、さらに一段の重みを加えた次第で、まことに慶賀に堪えないところである。

元來史料の乏しい滿洲史にあっても、入關前の清朝史については逆に甚だ豐富である。すなわち清朝側のものとして滿文老檔始め滿漢文の實錄や檔案などが殘存し、明側には明實錄以下多くの文獻があり、朝鮮側にも李朝實錄その他澤山の記錄がある。ただこれら諸文獻は、特殊な滿洲語で書かれていたり、或いは非常に厖大な分量であったりして、實際に史料として用いるのは實は容易でなかった。事實これまでの研究には、とかく史料の上に缺ける點のある憾みがあった。入關前の滿鮮關係を卒業論文に取上げて研究生活に入られた著者は、本書の自序の中で、「このような仕事をするために大學を卒業した觀がある」と御自身の研究生活を回顧されているように、その後、明實錄からの滿蒙史料の抄錄、滿和辭典の編纂、滿文老檔の譯注などの基礎的な仕事に當られたのである。かくして著者は、清初史の研究に不可缺な滿洲語を完全にマスターするとともに、明や朝鮮の諸文獻にも頗る精通されていて、本書の研究にも滿漢文の史料が實に丹念に集められている。加えて著者は極めて鋭い歷史的感覺をもち、社會史的に史料をまことに鮮かに料理されて行くのである。本書は正にそうした著者の永年の研究の見事な結晶といわねばならない。

さて本書は、本論四章と附錄五編から成るが、附錄の最後の一編を除いては、すべて戰後に比較的新しく發表された論文を補訂して收錄したものである。先ず第一章は「清朝の開國傳說とその世系」と題する。すなわち清太祖實錄に收められている開國說話並びに清帝室の直接の祖とされるニングタ・ベイレを對象として、その成立過程を說明し、太祖の世系が歷史的には建州左右衛に由來するのを、當時の氏族制社會を基盤として成立したものであるとしている。元來清朝の建國說話の批判は、内藤博士や稻葉君山博士により古く試みられたところであるが、難解なニングタ・ベイレの解釋について、著者はニングタはムクンの名稱であったとし、清朝の始祖ブクリ・ヨンションのブクリは金の始祖函普の弟保活里の名に基づき、ヨンションは武皇帝實錄にみえるように英雄をトランスクリプトしたものであるという新見解を出している。そして從來、明や朝鮮側の史料に對應するものがないので謎の人物とされていた太祖の曾祖父フマンを、その父シベオチ・フィァングとともに創作的人物と斷じ、金の熙宗の岳父斐滿達から出たとするなどの卓見が述べられている。またアイシン・ギョロ姓僞作の通說を否定していられ

るが、私にはやや納得しかねる。

第二章は「明末清初の滿洲氏族とその源流」で、主として天命年間に太祖政權の主軸となって太祖を助けた滿洲氏族について、その社會的身分を明らかにし、その源流をたずねることによって清室との歴史的結合關係を究めようとするものである。著者は八旗滿洲氏族通譜によって、滿洲貴族の最高峯にある八大家や五大臣の氏族を一々檢討し、それらが古くから建州左衛のオドリ族と密接な關係があり、その源流が遠く金代にまで溯ることを實證する。そしてさらに明代女眞の氏族について、かの龍飛御天歌にみえる女眞や兀狄哈の姓及び括兒牙姓を檢討し、金元にかけて胡里改路に形成されたイラン・ツメンを主領とする支配體制が、元末の動亂によって解體して、そのうちオドリ族を中心とした集團が南下し、土着の諸氏族をあわせてやがて太祖政權が確立して行った經過を說いている。

第三章の「ムクン・タタン制の研究」は昭和三十八九年に初めて發表された論文で、本書の本論全四章のうち最も新しいものである。初め發表された當時、私は拔刷を頂戴し、一讀非常な感銘を覺えたのであったが、今あらためて讀みかえしてみて益々その感を深くする。この第三章は實に本書中の壓卷で、頁數からいっても全體の約三分の一に當る。すべて十三節に分れ、滿洲社會の基本であるムクン・タタンに視點をおいて、太祖興起史の全體像をあらゆる角度から徹底的に分析して論じ、規模雄大である。周知のように滿文老檔太祖の卷の最後の三卷は「萬曆三十八年の檔子」と稱し、第一ムクンから第三ムクンまでの各ムクン所屬の各タタンごとに勅書の內容が記されていて、一般に族籍表といわれている。この族籍表についてこれまで諸氏の解釋があり、中でも安部健夫博士は最も意欲的にこれの意味を考えて、八旗制の研究に鋭いメスを入れられたのであったが、著者の新研究は安部說の批判から始まる。すなわち族籍表にみえる勅書を得た日附を、太祖が掠奪や買取りにより入手したものとする安部說は誤りで、襲封の日附だとされる。この著者の說は全く正しい。誤った前提に立って、ムクンとはオルジ(俘獲)を編してできた私的な家の奴僕もしくは公的なトクソ(莊)の隷民ジュセンであるとする安部說に對し、著者はこれをあくまでも血緣團體を表示する語であると主張する。ついで明末の女眞の明への貢勅制を問題にして、蔘貂の利を貪る太祖と李成梁との結合關係を論じ、當時の明の政治や社會との關連から太祖興起の經濟的關係を鮮かに分析している。要するに滿文老檔にみえる族籍表とは、太祖がハダの當主の名義の下に、その公認所有數三百六十三道を、開原驗貢によって行使した貢勅の配當表であったと說く。この族籍表よりマンジュ國の統治機構である五アンバン・十ジャルグチの制度を明快に解いている。次にタタンの實態を、近年の實態調査を參照して考え、元來タタンは採蔘狩獵の場合の假小屋であるが、十個內外のタタンがムクンを構成し、その成員は共同體をなしたという。このムクン・タタン制こそ採取經濟の基本單位で、マンジュ國にはムクン・タタン制による統屬關係が成立し、貢勅制と結合したが、やがて貢勅制の終焉により、新たに成立した八旗制のうちにムクン・タタン制は發展的變貌をとげて行ったと結んでいられる。

第四章は「初期滿洲八旗の成立過程」である。この問題については既に諸氏の研究があるが、何分にも史料が乏しいため、諸說紛々たる有樣である。著者は從來の諸說とは全く異る新しい見解を出され、グサは元代の水達々路五萬戶府の五十騎編制の紛に基づく明代

建州女直の軍制で、五ニルが一グ、五グが一グサを構成し、一グサは二百五十人のウクシンより成るとされる。しかし普通いう四旗や八旗との關係がなお檢討される餘地があるかと思う。また實錄に、辛丑の年（萬曆二十九年）に三百男を一ニルに編したというのは、ハダを收服したのを契機とするといわれるのは全く同感である。その他、從來解釋のつかなかった、李朝宣祖實錄にみえる串赤軍について、車盾兵の滿洲語 kalkangga の朝鮮訛したものとするなど新說を出されている。

さて以上の四章が本論で、そのあと約百七十頁に附錄五編が收められている。先ずその第一は「滿文史料解說」として、三部から成る。Ⅰの「滿文太祖老檔の編纂」は古く戰時中に書かれたもので、わが國における老檔の書誌的研究の始めであるが、四卷までをエルデニの著作、五卷以後をクルチャンの增補とするなどの卓見を早くも出していられる。ただ卷末の附記に記されているように、老檔の書誌的研究にはいわゆる原檔の檢討を不可缺とするのであるが、久しく行方の不明であった原檔が臺灣の故宮博物院に無事現存していることが最近明かになり、臺灣大學の廣祿・李學智兩氏による研究が發表されたので注意しておきたい。Ⅱの「滿文清太祖實錄のテキスト」は、舊北平圖書館所藏の善本でアメリカ議院圖書館に保管されている滿文太祖實錄の解說で、滿文太祖武皇帝實錄そのものではないが、形式內容ともに同じであることを明かにした勞作である。Ⅲの「清太祖實錄の纂修」は、「世管佐領執照」なる滿文の文書の內容から、現存の滿文老檔及び原檔に缺けている初めの部分に當る原檔が、康熙年間にはほぼ完全に殘存していたことを確かめ、太祖實錄の開國記を含む初期の記事も元來原檔にあったとし、さらに太祖實錄の纂修の過程や康熙重修の意義を考えていられる。

附錄の第二の「滿洲シャマニズムの祭神と祝詞」は、東大東洋文化研究所々藏の「祭祀全書巫人誦念全錄」なる滿洲シャマニズムに關する資料によって、特に滿洲文で書かれた祝詞を紹介し、次に祭神を論じたものである。本書の存在は夙く赤松智城博士により紹介されているが、滿文の祝詞によって新しい見解を提出されたものといえよう。

附錄の三の「清初の疆域」は、「申忠一の建州紀程圖記を中心として」とサブタイトルがつけられているように、名高い申忠一の圖記に見える地名を一々朝鮮音を通して考證比定されたものである。この圖記については前に稻葉博士の大著があるが、博士や和田清博士の地名の比定が大いに批判されている。ただ數葉插入されている圖記の寫眞は餘りにも小さく、文字を殆ど判讀できないのは遺憾である。なおできれば現今の地圖をも參考のため入れて頂きたかったと思う。また著者は同じく「清初の疆域」という題の論文を、別に朝鮮學報二十一・二號に發表して、建州衛の本據兀彌府の位置を論じ、園田一龜博士の說を駁して新說を唱えられたのであるが、これも本書に收錄しておいておかれたならば、利用者にとってより便利であったであろう。

附錄の四は「朱蒙傳說とツングース文化の性格」である。高句麗の始祖朱蒙に關する開國說話を分析して、それが狩獵社會に發生した始祖神で、滿洲のツングース系民族のいずれの時代にも當てはまる性格であることを述べる。そしてこれを、ツングース文化の母體をなすのは狩獵文化であるが、そこに農耕的あるいは遊牧的要素がつけ加わった文化複合の型式であると考えていられる。さらにツン

グース民族に特徴的にみられる遷住の意味を考え、曾つて稲葉博士によって唱えられた滿洲民族の文化還元性論の不充分さを衝き、白鳥庫吉博士の南北對立論にまで言及した史論を展開されている。扶餘から清朝まで、滿洲から起ったツングース民族の歴史について、その性格や特質をえぐり出したもので、著者の滿洲史に對する考えが最もよく現われているといえよう。

附錄の五は「滿珠國成立過程の一考察」である。これだけが戰前、それも昭和十一年という古い時期に發表されたもので、僞作說の多かった滿洲國號に對する從來の說の批判から始めて、マンジュ國の存在を確かめ、その社會の基礎を究明しようとした、當時にあっては頗る斬新で、新進氣鋭の研究家として甚だ意欲的な論文であった。附記にも記されている如く、滿洲社會に對する著者の見解は他の論文と大部違っているが、著者のこの分野の研究の出發點となった記念すべき論文として、特に卷末に載錄されたようである。ただマンジュ國という名稱の存在の根據を老檔及び原檔の記事においていられるのであるが、前述の原檔についての廣・李兩氏の研究によると、原檔自體その性質はそれ程簡單でないようであるから、今後なお原檔との檢討を要するかと思う。

以上本書に收錄されている各論文について一應の紹介を試みたが、要するに清の太祖の後金國の成立に至る過程の諸問題について、主として社會史的に考察したもので、頗る創見に富んでいる。そして著者の基本的な考え方は、當時の滿洲社會は狩獵を主生業とする氏族制であるということである。この考え方は本書の全體を通じて極めて強く打出されていて、すべてこの立場に立って議論が進められている。ただ著者は、ツングース系民族社會の特質を把握するため、狩獵を餘りにも強調されるのであるが、昨年史學會大會の東洋史部會の席上、江嶋壽雄氏も言われたように、農耕の面をもう少し考慮するとともに、中國文化の影響についてもやや意を用いてもよいのではないかと思う。

なお著者は自序の中で、入關後の清朝史の展望を試みられているが、今後大清國の問題をも取上げて頂くよう念願してやまない。淺學菲才、紹介宜しきを得ず、徒らに妄評を加え、著者の意を誤り傳えてないかと恐れるが、切に寛恕を請う次第である。（神田信夫）

中國社會經濟史研究

森谷克己 著

昭和四十年十一月
A5判　一七九頁

本書は故森谷克己（一九〇四―六四）教授の晩年の論文五篇と著者の談話の抄錄である「研究生活を顧みて」一篇を合わせて、遺族の方々により刊行されたものである。なお長男森谷宇一氏（東京都中野區沼袋町四丁目二〇ノ一二）等、二男二女の父に對する「追想」と女婿子安宣邦氏の後記、著者の年譜（著作目錄共）を附する。頁數は一七九頁。開卷に著者が岡山大學法文學部教授在任中の遺影と、京城大學時代の知友、鵜飼信成博士の序を載せる。この序は題して「正義と誠實の人」という。著者の知遇と示敎とをこうむった私は、この評はけだし適切だと共感する。

著者は二十一歳、あたかも治安維持法公布の年に、クノー「マルクスの民族・社會並に國家觀」（同人社刊）の翻譯を出版されて以